

「そうか、そうだね」という慰め

難波 雅紀

私が英文学科に赴任した頃は、木曜日の学科会議が終わった後に仲間と飲みに行くのが慣例でした。中心メンバーは、澤井勇先生、久永東輝夫先生、そして植野達郎先生で、常連に私や輿石哲哉先生、中田崇先生がいました。国分寺の行きつけの飲み屋に三々五々集まっては、日本酒を飲みながら楽しく賑やかに過ごしました。

やがて中田先生と輿石先生は他大学に転出し、久永先生は退職され、澤井先生は他界されるなど、メンバーが減っていきました。途中、村上まどか先生、稲垣伸一先生が加わったものの、店が移転したのもあって、木曜日の飲み会は成立しなくなっていきました。かく言う私も時間が取れなくなってしまい、物足りない気分で過ごすようになりました。

その後は、年に一、二度、植野先生が昔から御用達の新宿のバーで一緒にさせていただくのですが、その時だけは物足りなさを取り返した気分になります。というのも、ああでもない、こうでもないと私が愚痴をこぼし、マスターは私の話に茶茶を入れ、植野先生は「そうか、そうだね」と相槌を打って、私を慰めてくださるからです。退職されてからは、なかなかお目にかかれないかも知れません。でも、年に一、二度、例の新宿のバーで一緒にさせていただければ何より有難く存じます。そして、「そうか、そうだね」と相槌を打って、私を慰めていただければとても嬉しいのですが。

植野先生と仕事をご一緒させていただいて22年近くになります。その間、大学は激動の時代でした。先生は学科主任をはじめ、国際交流センター長、キャリアセンター長、文学部長といった要職に就かれていたので、校務に忙殺されながら変わっていく大学を日々実感しておられたのだろうと推察します。光陰矢のごとし。植野先生、長い間、ほんとうにお疲れ様でした。どうぞご自愛専一の上、豊かな日々をお過ごしくださいますよう、心からお祈り申し上げます。